

小刀をかみきった男（洲本市由良町）

洲本市由良町の八幡宮の神主（かんぬし）は、代々宮川家の人ですが、江戸時代の終り頃、宮川甚之丞（じんのじょう）という人がいました。その人は、生れつき、耳たぶと歯がとほうもなく強くて、洲本付近の人でも、誰一人それを知らぬ者はいなかった。それでも、みんなはそれを評判（ひょうばん）に聞くだけで、ほんとうに見たという人は、あまりいなかった。

だからある日、甚之丞が家の前で昼寝をしているのを見つけた近所の人々は、とても喜んだ。

「おい、いっぺんあの評判の耳たぶの固さを試して（ためして）みいへんか。」「手でつねったくらいではあかんぞ、いっそ、これでやれ。」とうとうみんなは、大きな釘抜き（くぎぬき）を持ち出してきた。大ぜいの人ばかりの中で、力自慢の漁師が、釘抜きでぐっとはさんだ。蠅（はえ）が止ったほどにも感じないのか、甚之丞はぐうぐう高いびき。とうとうじれなくなった漁師は、耳たぶをはさんだまま、「うーん」とばかりに引っ張ると、なんと甚之丞の耳たぶが少しのびてしまった。

ある日のこと、その甚之丞が用のため難波（なにわ）（今の大阪）へ出かけた。そのついでに、日頃から一つ欲しいと思っていた小刀を買おうと思って、店屋に立ち寄った。何しろ、小さな石ころ位、歯でかみわろうというほどの男だから、店先に並んでいる安物の小刀など、なまくらに見えてしかたがない。

「ざっとした造り（つくり）やな、もっとましなん、ないのかいな。」店の主人、えらそうに言うやつが来たもんやと思ったが、「はい、はい。」と、店の奥から出してきて見せると、ぞんざいなことばで、「これもあかん、こんなもあかん。」数十本の小刀がみな「あかん。」という。「ええい、こしゃくなやつ。」とは思ったが、名刀が無いと言われるのも店の恥と、とっておきの刀を持ち出した。

「お客さん、お金持ってはりまっか。これなんか、一振り（ひとふり）何両（りょう）（何十万円）とするんだっせ。」

「ふうん、これがここの店の一番ええ刀か。こんななまくら、歯でかみ切れるわ。」「お客さん、人をなぶるのもいいかげんにしなはれ。お店にとって、どなたも大事なお客さんやと思えばこそ、店中のもみんな見せてるのんに、刀を歯でかみきるとは、よう言うわ。ほんなら、やってもらいまひよ。見事、この刀を歯でかみ折ったら、店のもの、全部あげまっさ。さあ、はよやってもらいまひよ。」主人は、頭からゆげを出して、かんかんになっておこった。甚之丞はすましたもの。

「やれ、いうんなら、やったるわ。ほやけんど、だれぞ証人（しょうにん）がおらんと、あほらしてやれんわ。」ますます頭にきた店の主人は、はだして隣の老人を呼びに走って、連れてすぐ帰ってきた。

二人を前にした甚之丞、手もとにあった小刀を取ると、ふっとかみ切った。主人はびっくりしてしまって、まっ青になり、ひらあやまりにあやまった。横から老人も必死になってわび、「どうか、助けてあげてください。」と、すがるように言う。甚之丞は、「証人までつけたかけやさかいに、店の品物はみんなわしがもらいます。けれど、この小刀一つだけは子供のおもちゃに貰って（もらって）、あとは、改めてわしの方からさしあげますわ。」

とにっこりして言った。

店の主人の喜んだことはいうまでもない。隣の老人と二人して、甚之丞の姿が遠くに消えてしまうまで、何度も何度も頭を下げておりました。

